



十二

海音寺
潮五郎
全集

海音寺潮五郎全集 第十二卷

明治太平記

全二十一卷・第二十回配本

九〇〇円

昭和四十六年五月二十日発行

著者 海音寺潮五郎

装幀 芹澤銑介

口絵 中尾進

発行者 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

目次

明治太平記

三

鷺の歌

三五

明治太平記

昭和二十六年六月一日—十二月三十一日「読売新聞」

銀 写 真

ひきしまったからだは弾力があつて、指先に、かっちり
とこたえるかたさを持つているくせに、膚の滑らかさは、
ビロードめいたしなやかさで、しつとりとねばり、まさぐ
っている手のひらを吸いつけるようであつた。

「ねえ、そうしましょうよ」

「ああ」

「すぐそこなのよ。三町ぐらいしかないのよ……。聞いて
いらっしゃるの」

「聞いているよ」

「行きましょうよ、ねえ」

「ああ」

「ほんとよ……そんなに、なでまわしちゃ、くすぐりたい
じゃないの」

女は、まるいので、ころころと笑いつづけた。笑うた
びにふるえが、こちらのからだに伝わる。

女は身をすくめ、笑いながら、身もだえしていたが、い
きなり、

「いやーっ」

とさけんで飛びおきた。

男は酔つておぼろな目で、女が、友禅模様のじゅばんの

えりをかきあわせて、まるい肩や、ふっくらとした胸の隆
起をかくすのを見ていた。

「起きなさいな。行きましょうよ」

「どこへ行くんだえ」

男はきよんとした目を、女にすえた。酔つた目はちら
ちらして、力をこめて視線をすえなければ、花の咲いたよ
うに派手な女の顔が、すぐおぼろになる。

「あら、ちつとも聞いていらつしやらないじゃありません
か。もつと静かない場所があるから、そこへ行こうつて
いつているのよ」

「ああそうだった」

男は、気が進まない。動くのが大儀だ。

「さあ、起きて起きて」

女は男の手をつかんで引きおこしにかかった。その黒い
目のかがやきと、紅いチューリップの花のようなあざやか
な唇とが目につくと、男の気は、急にかわつた。

「よしきた」

と、勢いよくはねおきた。

「着物を着て待つてね。あたしは、あちらで支度して、
すぐ来ますから」

女は、自分の着物をかかえ、せまい階段をおりて、茶の
間に入った。

茶の間の長火鉢の前に、ねずみにひかれそうなつくねん
とした姿で、若い男が、たばこを吸っていた。浅黒くひき

しまった顔に、生き生きした目をした、すばしっこそうな男であつた。きせるをくわえたまま、じろりと、女を見上げた。

女はその前に、白い内もの見えるたちひざで坐つて、

「かなり持つているようよ」

と言ひ、耳に口をよせてなにやらささやいた。男は首をふつて、二言三言答えたが、女がなお言うと、黙つて立上つた。

二階の男は、ふらふらしながら、枕の下から引出した胴巻を、腰にまいた後、おぼつかない手つきで、着物を着てしまった。どっかり坐つて、帯の間から斜子の銀時計を出して、ふたをあけた。

「……十時……十分前……」

針を見る目もふらつくらしく、長い間かかつて、読みとつた。

小でつぶりしたからだを、対の結城つむぎの着物につつんだ、大店の支配人といった人品の、四十年輩の男である。

しばらくの後、男と女は、大川端を、肩を組み合つて歩いてゐた。

男の足はよろめき、ともすれば全身の重みを女にかけるので、女は息をきらし、薄く汗ばんでゐた。

月もなければ、星もおぼろな暗い夜である。潮が上げて、河心がまるくふくれ上つたように見える水面に、向う

両国の灯影がゆれながら、点々と映つてゐた。潮の香をふくんだ生温かい風が、ほおを吹く。

「どこへ連れて行くのかい。もうずいぶん歩いたぜ」

「すぐそこ。もう半町ないわ」

「もう歩くのが、いやになつた」

その時、岸の柳のかげから、黒い人影が出て来て、正面から、男につきあたつた。軽く触れたと見えたが、じゃけんほど強い力がこもつていて、男は一間ほどはね飛ばされて、あおむけにたおれた。

「こら！ なぜ人をつき飛ばす！」

男は片手をついて、半身をおこし、酔っぱらいらしい声で、とがめた。

「手前の方からつき当つてながらなにを言やがる！」

たたきつけるようにさげんだ、と思うと、獲物におどろかかる獵犬のように、おそいかかつて来た。

「あっ！ これ、なにをする！」

相手は、片手で男ののどをおさえ、片手でふところの胴巻を引きずり出そうとする。白い歯をむき出し、ぎらぎらと光る目が、恐ろしく凶暴であつた。熱い息が顔にかかる。

「人殺し！ あっ！ 追いはぎ！」

必死に抵抗しつつ、助けを呼んだが、のどをおさえている手は、ますます強く、声が出なかつた。間もなく、男は、敵が数人にふえて、四方からおさえつけ、なぐりつ

け、引きずりまわしているのに気づいた。

恐怖が、胸をつめたくした。殺されると、思った。

(金はやる、命は助けてくれ)

というつもりであったが、声にならず、しだいに気が遠くなった。

すると、突然、黒い雲のように、周囲におおいかぶさっていたものが、すーっと散り、自分をおさえつけていた力ごとけ、胸にさわやかな空気が流れこんで来た。

男には、わけがわからない。助かった、ということだけを感じた。彼は、はね起きて逃げようとしたが、二、三步でたおれ、どうもがいても立つことができなかった。腰のつがいががくがくして、足が、言うことをきかなかった。

一人の男が、五人の男を相手に、もみ合っていた。おそろしく強く、また、すばやい男である。五人の間を、飛ぶ鳥のようにくぐりぬけながら、時々、鋭い気合を発するのだが、そのたびに追いはぎどもは、大きく宙に舞っては、すさまじい水音と、しぶきを上げて、大川に投げこまれる。まるで、自ら進んで、飛びこんで行くように見えた。

まばたきを三つか、四つするくらい短い時間に悪党どもを片づけてしまつて、側へ来た男を見ると、黒のものもひきに、黒のはんてんを着た、去年あたりからはやはりはじめた人力車夫であった。

「けがしたんですか」

「立てない。腰が……」

車夫は、後ろにまわつて、手を男の肩にかけ、ひざがしらで、腰のあたりを強く突いた。男はびよこんとおどり、同時に立上っていた。

男は、礼を言いながら、女のことを思い出して、きょうきょうと、あたりを見まわした。

「なにをさがしているんです」

「女——女がいたはずだが」

車夫は、あたりを見まわした。

「どんな女です」

この時になって、男は女があやしかった、と気がついた。

「なんでもない。ただ、ちょっと。——お前さん、車屋さんかね」

「そうです」

「それじゃ、日本橋の安針町まで行っておくれ。車は、持つて来ているのだろう」

「持つて来えます」

「ひどい目にあつた。いきなり出て来て、追いはぎしようとした」

車は、少しはなれた道の真ん中に、ひきすててあつた。そこまで行つて車に乗った。

当時の車は、鉄輪である。大川端の暗に、けたたましい音をひびかせつつ行つて、間もなく、乱闘の行われた地点

から、小半町、下流の岸の柳の蔭から、さっきの女が出て来た。袖にすばめた両手を胸に重ね、なで肩の、すらりとした立姿で、まだかすかに車の響きの聞えている方角を、思い入れのあるふせいで見送っていた。

間もなく、岸の石垣のかげから、にゅっと、人の頭が出た。もどりの切れたざんばら髪で、濡れしよびれて目ばかり光っていた。つづいてもう一つ、さらに一つ、都合五つ出て、ずぶぬれのからだを、しおしおと、はい上らせて来た。

最初の頭が現れた時から気づいていながら、女は口をきかず、つめたくとりすました目で見ていたが、五匹のぬれねずみが、面目なげに自分の前に並ぶと、いきなり、はげしい言葉をたたきつけた。

「いくじなし！」

「そうおこったって……」

「ちえっ！　なんてえさまだい。五人も、いい悪党がそろつていながら、たった一人の車ひき風情の手玉にとられるなんて」

「だって、あれあ士族だぜ」

「士族？」

「おいら、あいつの帳場を知っている。須田町の筋違御門ぎわの山田屋っていう車宿にいやがる士族なんだ」

女はしばらく黙っていたが、たちまちいきり立って、
「士族だったら、手玉に取られていいってのかい。ばかば

かしい。あたしだって、士族さ、東京府貫属の士族、三年前までは、れっきとしたお旗本だよ」

と、言いすてて歩き出した。

「おりんさん」

と、一人が呼びとめたが、ふりかえらなかつた。両手を胸に重ねたままの姿で、思案に沈む目を伏せて、行ってしまった。

二三十分の後、車は、安針町の岩手屋というはたご屋についた。

「お前さんは、命の恩人だ。このままでは帰せない。中へ入っておくれ」

と男は言ったが、車夫は、礼なんぞいらぬことだ、ここまでの車賃だけもらえばいいと言う。

「それでは、あたしの気がすまない」

「車賃だけいただきますよ」

まるで、動く色がない。二十四五、というところだろうが、しなやかにのびた体格で、凜と眉のさえた、ひきしまつた顔をしている。

「これは、士族だ」

と、男は思った。絹糸のようなつややかさをもった髪をざんぎりにしているのも、平民には、ほとんどまだ見ない風俗である。

須田町筋違御門の筋向いに、山田屋金作の車宿がある。創業は宝暦年間、町かご屋だったのを、人力車が出現する

と、いち早く車宿に切りかえたのが、去年の秋。

昼は、「御免人力」と染め出したのれんを、夜は、同じ文字を書いた大提燈を軒に出して、間口五間のたたきの土間に、黒漆や朱漆の地に、金銀そのほかいろいろな漆で牡丹・芍薬・百合等の草木、唐獅子・孔雀等の鳥獸、花和尚魯智深・鎮西八郎為朝・滝夜叉姫等の豪傑を描き出した人力車が、糊性なくらい、丹念な手入で研ぎ上げられて、びかびか光って、六、七丁ならび、土間にじかにうがった囲炉裏をかこんで、いつも引子が五、六人、たばこを吸ったり冗談口をきいたり、鼻水をすすったり、時々、小ばくちを打ったりして、客待ちしていた。

「ごめんなさい。ちよいと、車を出してほしいんですけれど」

朝の十一時頃であった。ふと、入口に影がさした、かと思うと、すらすらと入って来て、こう言ったのが、すばらしい美人だったので、車夫らは、とっさに、返事ができなかった。

ぶどう茶の結城つむぎのあわせに、黒ちりめんの羽織、きんらんの帯という、高級官員の奥様風といった、上品ごのみの服装だが、うるさいほど、たつぷりとある髪は、いき好みに根のひくいちょう返しで、金のかんざしの、赤いさんごがあざやかだった。青く見えるほどきめのこまかな、白粉けのない顔で、張りのある二重まぶたのかがやく大きな目と、西洋種の草花のように、あざやかで大きな

唇とが、生気にあふれているのが、目立った。

「へい、どちらまで」

「とやと立直って、一人が聞くと、

「築地まで行きたいんだけど」

「言いながら、車夫らを見まわし、

「今日は、修さんはいないようね。どこかへ、もう出たんですの」

車夫らは顔を見合わせ、それからこたえた。

「あの人は、昼はひきません。夜だけでやす」

「ああそう。夜だけね」

女が、車で行った後、のこった車夫らの間で、あの女はなんだろう、というのが話題になった。奥様風のところもあるがひどくあだっばい、といって、権妻でもなさそう。権妻などで納まっているには、いきがよすぎる、という皆の意見だった。

「修さんのことを、聞いてたね」

「聞いていた」

「修さんに聞いたら、わかるだろう」

車が出て行ったり、帰って来たり、車夫らの顔ぶれが朝とすっかり入れかわってしまった、午後の三時頃、一人の男が入って来た。

「ちょっと聞きますが、ここに滝山修平という二十四五の若い衆がいますか」

「いますぜ」

「士族ですか、会津の」

「そうでさあ」

「髪を、ざんぎりにしていますか」

「ざんぎりですぜ」

「たけの高い、いい男ぶりですか」

「ずいぶんいい男ですぜ」

大店の支配人といった風の、もっともらしい人品の男が、へんなことばかり聞くので、車夫らは驚いていた。

「……こんなわけで、その若い車屋さんは、命の恩人です。なのに、礼も受取らず、名前も言わないで、さっさと、行ってしまうなされた。あたしは、今朝から、方々の車宿を聞いてまわったんだが、どうしても、わからない。とうとう、この先の警察屯署に飛びこんで聞くと、この家に、滝山修平という若い衆がいるが、話の様子がそれらしい、と言うので、こうして来たんですよ」

と、その男は、車夫らに物語った。

「修さんですよ。修さんに違いありませんや。そんな人でさあ、修さんて人は」

そんななかまを持っていることが、車夫らには、ほころしかった。

「しかし、修さんは今いませんよ」

「へえ？ 車をひいて出ていなさるのです？」

「そうじゃありません。あの人は、夜だけ働いて、昼間は学校に行っていますんでね」

「学校に？——そうですか。——へえ、学校にねえ……」
感服した様子だ。昨夜のいさぎよさも、大いに合点（がてん）いた、という様子をする。

「どこの学校です」

「芝の新銭座の、福沢さんの学校ですよ」

「なるほど、はやりの学校ですな」

と、男はますます感心した。

その時、帳場にかかっていた振子時計が、ちーんと、一つ打った。

三時半だった。

「ああ、もうこんな時刻か。ひよつとすると、修さんはいもう帰っているかも知れねえな。お前、御案内（ご案内）して行ってみなよ」

と、中年の引子が、若い引子に言った。

「それはありがたい。お礼はします」

「礼なんざいりません。山田屋のものは、そんなことで、礼なんざもらわねえことになっているんでさあ」

過去は知らず、将来は知らず、修さんの美事善行にたいする感激の真つ最中にある若い車夫は、鼻をそらして、ことう言いはなった。

柳原の堤にそった町を、一町ほど下った横町に、子供相手の駄菓子売っている家があった。そこで若い衆は立ちどまり、窓の障子に、夕陽のあたっている二階を見上げ、帰っているようですぜ、と、連れに言って、「修さん、修

さん」と呼んだ。

がらりと、障子があくと、昨夜の青年が、半身をあらわした。紺がすりの着物に、しま小倉のはかまをはき、すっかり書生風になっていた。

「お客さんだよ」

若い衆は、そう言つて、礼を言うひまもなく、さっさと行つてしまふ。青年は、二階の窓から、げんそうに眉をひそめて、客を見下ろしていた。客は、ていねいに頭を下げた。

「昨夜のお礼に来ました」

「ああ、あなたでしたか。しかし、こまるなあ。……とにかく、下へおりて行きます」

青年がおりて来るまでに、男は駄菓子だかしの箱の横を通つて、上りがまちまで行つて、待つていた。

「あのままでは、気がすみませんので、朝から、方々たずね歩いて」

と、先刻の話をすると、

「そうですか、では、まあ上つて下さい。——大変きない所ですから、驚かないで下さいよ」

と言つて、ぎしぎしと鳴るせまい階段を二階に連れて上つた。

なるほど、これは書生のへやだ。

窓際に机がおりてあり、置床に、大小が立てかけてあり、壁にそうて、いくつかの本箱がおりてあり、入りきれ

ない分は、無造作に、壁際に積重ねてあつた。三分の一ほどは、背に横文字の入っている洋書で、机の上にひろげてある読みかけの書物も、こまかな横文字のぎつしりとつまっているものであつた。

「南部盛岡の鍵屋茂兵衛の支配人、堀松之助」

と、男は名乗つた。

店の用事で横浜まで行く途中、ある用件のため、数日東京に滞在したが、昨夜、日本橋の通りを歩いていると、美しい女に、袖をひかれた。酔っている頭に、以前国許で小耳にはさんだことが、思い出された。——御一新で禄になれた直参方じさんかたの奥様や姫君が、貧にせまられて、芸者になつたり、女郎になつたりするのが、この頃、東京ではずいぶん多いが、なかにはみえがあつて、そう大っぱらにできず、源氏宿に出入りしたり、町で袖引きしたりしている者も少なくない、東京の官員の間では、これを「高等の内侍」といつて、恐悦がっている。勾当ノ内侍をもじつたところ

が、いかにも官員のしゃれらしい——

だから、その女を見た時、

「あ、これだ」

と、思った。

年がいもないことだったが、なにしろ酔っていた。つ

い、引つ張られるままに、ついて行つた。

場所はどこだか、よくわからない。大川端が近かつたから、高砂町か、なにわ町か、なんでも、そのへんだったろ

う。

それから連れ出されて、あのあぶない目にあった。

「なんにしても、おかげで命拾ひしたのですから、お納め下さい」

堀松之助というその男は、長々と、事の次第を物語って、一目で、金とわかる紙包みを、さし出した。

押問答をくりかえさなければならぬ、と思うと、青年は、めんどくさくなつた。じゃあ、もらいます、とぶっさらばうに言つて、受取つた。

相当骨がおれることと、覚悟していたのに案外あっさりと出られて、松之助は、やれやれ、これで念がといた、と言いながらも、ちよいと拍子抜けしたようであつたが、すぐ話題をかえた。

「あなた様は、会津でいらっしゃるとか」

「そうです」

「会津では、大変でいらっしゃいましょうね」

京都守護職としての維新前の働きと、奥羽戦争における強硬な抗戦のために、会津藩にたいする新政府の風当りは強く、二十三万石没収、かわりにあたえられた斗南三万石は、青森の北端、氣候は酷烈、土地は不毛に近い未墾の荒地で、藩中をあげて、慣れぬ手に、すき・くわをにぎつて、来る日も来る日も、血の汗をしばっている惨烈な状態に陥っている。

鍵屋の番頭は、このことを言つたわけだが、修平はた

だ、

「しかたないですよ」

とだけ言つて、笑つた。

その微笑が、松之助の胸を打つた。どうにかして、この感心な書生さんの力になつてあげたい、と思つた。しかし、なまじなことを申出たところで、承知する相手ではない。

松之助は、真剣に思案した後こう言つた。

「あなた様は、二、三日、わたしと一緒に、横浜へ行つていただけませんか。少しまとまった金を持って行くのです、昨夜のことで、すっかりおじけがついてしまひましてね」

「……………」

「あなたに行つていただければ、安心です。うんと、言つて下さい」

「横浜は、どこです」

「居留地の外国商館です」

行つてみよう、と思つた。一ぺん、横浜の居留地を見ておくのも、悪くない、と思つた。書物の上だけで養つた語学が、実際の会話に、どの程度役に立つものか、ためしてみたい、とも思つた。

明日、朝の七時までに、安針町の宿屋まで来てもらいたい、支度は全部、自分の方でしておく、と言つて、松之助は歸つて行つた。

山田屋に、旅に出ることを、ことわっておかなければならない。修平は、下へおりて行った。すると駄菓子箱の向うに、若い女が立って、家主の婆さんと話していたが、足音を聞いて、こちらを見た。かがやく大きな目と、西洋種の赤い花を思わせる唇が、おそろしく、生き生きしたものを感ぜさせる女であった。美人だな、と思ったとたん、その女は親しげに笑いかけてきた。修平は、どきつ、とした。

「あのう、車をお願いしたいんですけれど」

「まるで、やわらかく、しとやかな声であった。

「車？ 車がどうしたんです？……」

「浜町まで行っていたみたいですけど」

「ここには、車はありません。筋違御門前の、山田屋へ行つて下さい。いつも四、五丁はいるはずですよ」

「あなたに行っていたみたいですけど」

「僕に？……どうして、僕でなければならぬんです」

「なぜとはなしに、修平は、うろたえた。女は、答えな

い。かがやく大きな目で、修平を見つめ、赤い大きな唇に微笑をたたえているばかりである。修平は、ますますうろたえ、

「僕は、今日は引かんのです。明日から二、三日、旅に出るので休むのです」

「と言って、逃げるように、二階に退却した。

「ああ、おどろいた」

机の前が、一番安全なような気がするので、そこに坐つたが、胸がどきどきして、しばらく静まらなかつた。

やがて、女の立去るらしいけいはがした。窓の障子を少し開けてのぞくと、薄い夕陽のさしている通りを行く後姿が見えた。すうりとしたからだにまとった、黒の紋つき羽織のえりを抽く首筋が、くっきりと白かつた。

障子をしめ、はお杖をついて、

「どうして、あの女は、あんなことを言ったのだろう、一体なにものだろう」

と、考えこんでいたが、急にはげしく頭をふると、机のひき出しをあげ、そこにあった紙入れから、紙で幾重にもつつんだ、小さい四角なものを出した。

紙を解くと、それは、一枚の写真であつた。表面を覗くい方に向け視線を加減して見なければならぬ、銀板のその写真には、十六七の娘の全身がうつっていた。

おぼろなその写真に、青年は、現実に見るよりも、あざやかに面影がたどれるのであろうか、それとも、数々の思ひ出が、よみがえってくるのであろうか、その目はしだいに切なげなものをたたえてきた。

女勇士

横浜の外人居留地は、今も、その名称はのこっている関

内にあった。

この地が、開港場になって間もなく、幕府は、長崎の出島^{じま}にならって、幅十間の掘割をうがって、他とへだて、三カ所に関門をもうけ、これを関内と呼び、半分を日本町、半分を居留地とした。

日本町は海岸通・北仲町・本町通・南仲通・弁天通のいわゆる関内五町。居留地は今の山下町で、家の建った順序に、持主の国名をつけて、英何番館、亜米何番館と呼び、この時代には、大体三百館内外あった。

建築様式は、純洋風ではなく、石、または煉瓦造りだったが、日本瓦でふいた、日本式二階建の洋館であった。しかし、それらがずらりとならび、屋上高く、それぞれの国旗をひるがえしている景観は、当時の日本人にとっては、壮麗にして、奇妙不可思議な異国情緒の横溢している地域であつたろう。

夕方、横浜についた二人は、弁天通の駿河屋^{するがや}某という松之助の宿屋に、わらじをぬぎ、翌朝の七時頃、居留地に向つた。関内では、一般人には帯刀をゆるさない規則なので、二人とも丸腰で、修平は、三尺ほどの木剣を、ステッキがわりにつき、松之助は、ふりわけにした荷物を、肩にかけていた。

このふりわけの中には、太政官^{たいていこう}の五円札で二万五千両という大金が入っている。東京を出る時、松之助は、これを修平に見せて、

「だから、あなたのような、腕に覚えのある人に、ついて行ってもらわなければならないのです」

と、言った。

「居留地のエマニエル・モレス商会というのに、支払うのです」

とも言った。

よく晴れてはいたが、海に白波の立つくらい、やや強い風があつて、肌寒い朝であつたが、街路には、早くも騎馬や徒歩で散歩している、外人の姿が見えた。想像もつかないほど真黒な皮膚をした黒人下僕や、頭に、辮髪をまきつけた支那人下僕が、バケツやほうきをかかえたまま、目をむいたり、唇をとがらしたりして、奇妙な調子の言葉で、際限もない立話しているのがめずらしかつた。

どの家も、もう一日の仕事がはじまって、よろい戸をひらいた窓ガラスごしに、執務している西洋人や、その使用人である日本人の姿が見えた。さすがに、ここで働いている日本人には、ちょんまげはいない。短く切つて、きれいにわけ、油で、てかてか光らせている。着ているものも、和服はごくわずかで、大ていは、洋服だった。

やがて、松之助は、赤煉瓦の家の前で立ちどまった。海岸通から、少し入った横町で、屋上に、三色のフランス国旗が、ちぎれそうにはげしくはためきながら、ひるがえっていた。入口に真鍮^{しんすう}の門標が打ちつけてあつて、黒い活字体の文字が“EMANUEL MORES ET CIE”と読まれた。

ガラスのドアをおして入ると、胸の高さに木製の台が胸壁のようにつらなっていて、その向うに五、六人の日本人が、テーブルにむかって執務していたが、松之助を見ると、すぐ、一人立って来た。

「おお、これは、いつお出で？ 昨日の夕方？ それはそれは」

と迎えて、入口の横のドアをあけ、そこに応接室へ案内した。

「オイデナサーイ」

へんな抑揚のついた言葉で言いながら、西洋人が入って来て、いきなり、松之助の手を握って、はげしくふり、次に、修平の手をつかんだ。温かくて、やわらかな手であった。

「カーギ屋ノ、ヒト・デスカ」

「ちがいます。わたしの友達で、道中の用心のために、一緒に来てもらった滝山修平さんです」

「オオ、ソーデスカ。ターキヤマサン、ワタクシ、エマニエル・モレス商会ノジャボン（日本）代理人、ジャン・フィッシュエル」

日本人とあまりかわらない背恰好で、血色よく、太り、少し猫背で、アザラシのように唇にたれ下った太いひげと、大きな柔和な目をもった、人の好きそうな四十年輩の人物であった。

つづいて、日本人がひとり入って来て、

「お出でなさい。お久しぶりです」

と、松之助にあいさつした。黒い光沢のある洋服が、たくましい肩と、たけの高いからだに、しっくりと合って、姿を見ただけでは、西洋人にまごうばかりだったが、やや面長の端正な顔が、すきとおるばかりに青白いのが異様な感じであった。

その男を最初見た時、修平は、おや、と思ったが、だんだん見ているうちに、間違いないと思った。立上った。

「神保さんじゃありませんか」

男は、おどろいたようであった。眉をひそめ、澄んだ目で修平の顔を凝視した。

「おお、君は会津の……」

「滝山修平です」

「これは奇遇だ。そうか。滝山君か……」

フィッシュエルも松之助も、この旧相識の思いがけない出会いを面白がったが、男は、さっさと、その問題をはなれた。

「とにかく、用事からすませてしましましょう」

昔、この男がすばらしいフランス語の力を持っていたことを、修平は知っていたが、今でも、それは少しもおとろえていないらしく、すらすらと、通訳して行った。

どうやら、話の要領は、鍵屋が、その経営している鉱山を抵当にして、モレス商会から、七十万両という金を借りる約束をしたが、借りる必要がなくなったから、解約す